

自ら進んで運動に取り組む、 健やかな心と体を持つ児童の育成

秩父市立高篠小学校

1 研究の目的

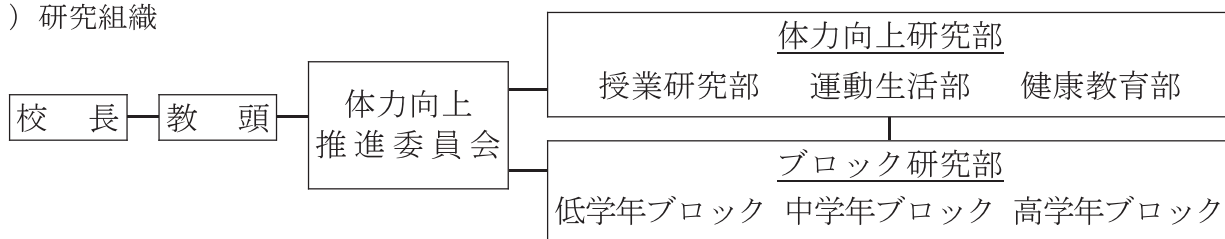
本校は平成25年度、26年度の2年間、埼玉県教育委員会から体力課題解決研究指定校として委嘱を受けた。校内研修は体力向上を中心とした取組を行ってきた。

本校児童の運動面での実態を見ると、平成25年5月の新体力テストでは、総合評価A+Bの割合が46.4%であった。また、「立ち幅跳び」と「握力」に関しては、県平均を下回る学年があり、「跳躍力」と「握力」が本校のここ数年の課題である。また、健康教育の面においては生活習慣のさらなる改善が課題である。

そこで、本校の研究主題を「自ら進んで運動に取り組む、健やかな心と体を持つ児童の育成」と設定した。また、目指す児童像を「元気いっぱい 運動大好き しのめっ子」とし、体力の向上と運動好きな児童の育成を目指した取組を実践してきた。

2 研究の実践内容

(1) 研究組織



(2) 各体力向上研究部の仮説

ア 授業研究部仮説

体育科の授業において、子どもが「できる」「のびる」体験を積み重ね、運動の楽しさを味わわせる授業を展開すれば学習意欲が高まり、自ら進んで運動に取り組む子が育つであろう。

イ 運動生活部仮説

児童の実態を基に環境を整備し、体育授業以外の運動を充実させれば、自ら進んで運動に取り組む子が育つであろう。

ウ 健康教育部仮説

身近な健康に関する実践を通し、子どもたちの理解が深まる指導法を工夫したり、健康な生活をめざす生活習慣の改善や家庭との連携を図ったりすれば、健やかな心と体を持つ子が育つであろう。

(3) 各体力向上研究部の取組

ア 授業研究部

- (ア) 発達段階に応じた指導法の工夫・改善や年間指導計画の見直し
- (イ) 高篠小「体育授業の基本」を作成することによる学習規律の確立
- (ウ) 自校体操（しのめ体操）による学校統一の準備運動・補助運動の実施
- (エ) 発達段階に応じた思考力・判断力・表現力等の育成と言語活動の充実

イ 運動生活部

- (ア) 児童の運動実態調査の実施とその分析
- (イ) 生活体育の環境整備「高小運動がんばりカード」の作成と実施
- (ウ) 業前運動の工夫改善（毎週木曜日ロング朝遊び：朝遊び補助員を活用した外遊びの奨励）
- (エ) 業間運動の工夫改善（毎週金曜日わくわくタイム実施：しのめ体操、なわとび、マラソン）
- (オ) 体育部教師と運動委員会児童による鉄棒教室（業間休みに年12回実施）

ウ 健康教育部

- (ア) 児童の生活実態調査とその分析（早寝、早起き、朝ごはん、朝うんち調べ）
- (イ) 食育の積極的な推進
- (ウ) 生活習慣の改善と推進
- (エ) 保健学習・保健指導の充実

(4) 「絆の授業10」を目指した各ブロックの研究授業の取組

絆の授業10

- 1 いつも笑顔で子どもたちを迎えます。
- 2 拍手やハイタッチでムードを盛り上げます。
- 3 少年のような新鮮な感覚で教材研究をします。
- 4 子どもたちとのコミュニケーションを大切にします。
- 5 子どもたちへのねぎらいの気持ちを大切にします。
- 6 発問や言葉がけで、子どもの気づきを大切にします。
- 7 リズムやテンポで運動量を確保します。
- 8 発表や教え合いの場面を重視します。
- 9 評価を大切にし、深い感動や意欲をかきたてます。
- 10 家庭への情報発信で絆を深めます。



ア 低学年ブロック

1年生：ボール投げゲーム（ゲーム）10月31日、11月28日実施

イ 中学年ブロック

3年生：跳び箱運動（器械運動）5月19日

4年生：セストボール（ボール運動・ゴール型）10月31日、11月28日実施

ウ 高学年ブロック

6年生：バスケットボール（ボール運動・ゴール型）6月5日実施

5年生：マット運動（器械運動）10月31日、11月28日実施

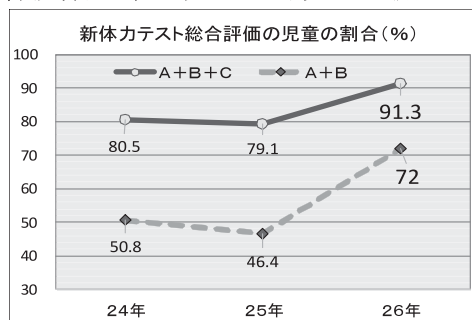
(5) しののめ台の整備と活用

本校の校庭東側にある高台（しののめ台）を活用した体力向上の取組を行っている。体育授業にしののめ台の登り下りを取り入れたり、「しののめクロスカントリーカード」を活用したりすることにより、休み時間にも子どもたちはしののめ台に登って遊ぶことが以前より多くなった。

しののめ台の整備は、夏休みのPTA奉仕作業と地域の方々に参加をさせていただいている「しののめ台倶楽部」の奉仕作業で、子どもたちが安全に活動できるようにしている。

3 研究の成果

- (1) 「絆の授業10」を授業に取り入れたことにより、体育授業の中で友だちや先生の励ましの声が多くなり、雰囲気の良い授業となった。その結果、朝遊びを進んでやる児童と運動好きな児童の割合が増えた。
- (2) 教具や環境面を充実したことにより、運動の生活化が図られ、子どもたちが意欲的に運動に取り組むようになった。
- (3) 「早寝、早起き、朝ごはん、朝うんち調べ」を継続的に取り組むことにより、家庭と協力しながら、生活習慣の改善が図られるようになってきた。
- (4) 様々な体力向上に関する取組を行った結果、新体力テストの総合評価において、平成25年度は低下傾向であったが、平成26年度は大きな伸びが見られた。



4 今後の課題

- (1) 「元気いっぱい 運動大好き しののめっ子」の育成を目指し、今後も体育授業の工夫改善に取り組んでいく。
- (2) 児童自らが、運動や遊び方工夫して、楽しみながら積極的に体力づくりができるよう、運動の生活化を図っていく。
- (3) 心と体の健康づくりにおいて、保護者や児童の意識は高まってきたが、まだ望ましい態度や習慣が身に付いていない面も見られる。今後も家庭と連携して継続的に取り組んでいく。

(担当 教諭 宮原宏成)

学力向上を目指した学習指導の工夫 ～表現力（発表力）の育成を通して～

秩父市立大田小学校

1 はじめに

本校の児童は、自ら進んで学習したり、活動したりする態度は十分とは言えない。また、自分の思いや考えを話したり発表したりすることが苦手な児童が多く、国語科では「読み取る力」「自分の考えや思いを書く力」算数科では「考えを説明する力」が不足している。さらに、全国学力・学習状況調査の結果からも基礎的・基本的な知識・技能は概ね身につけているが、思考力・判断力・表現力の力が弱いことが明らかとなっている。特に、考えの根拠や筋道を明らかにして表現すること、物事を多用な観点から考察する力や複数の情報をリンクさせて考察する力に課題がある。これらのことから、学習課題に対して自分の考えをもち、それを根拠や筋道を明確に表現することで、相手にわかりやすく伝えることができ、主体的に課題を解決する児童を育てたいと考え、本主題を設定した。2年目の継続研究である。

2 研究の概要

(1) 研究主題

学力向上を目指した学習指導の工夫～表現力（発表力）の育成を通して～

(2) 仮説と手立て（全学年共通）

1 仮説 1

個に応じたきめ細やかな指導を繰り返せば一人一人の表現力（発表力）の定着が図れるであろう。

2 手立て

- ・言語活動を意識したワークシートの活用
- ・復習プリントの計画的な実施
- ・「家庭学習・読書貯金」の取組の実施と習慣化
- ・ペア、グループ学習などの学習形態の工夫
- ・「短い記憶から長い記憶へ」を合い言葉にして「切り返しの発問」で授業にやりとりを生み出す学習活動の実施



下学年

1 仮説 2

具体物を用いた活動や友だちの発表の良い点に気づかせることにより児童は意欲を持って意見を伝え合うことができるであろう。

2 手立て

- ・課題解決のための絵、図、ワークシート、ブロックの活用
- ・2人組、グループ、全体での発表の工夫
- ・「学習すること」「わかったこと」カードの子どもたちへの意識づけ



上学年

1 仮説 2

「やりとりのある学習活動」を意図的に取り入れ、学習形態を工夫することにより、児童の発言力（発表力）を高めることができるであろう。

2 手立て

- ・まとめ方の工夫（ふりかえり）
- ・ペア学習・グループ学習、発表会形式の授業等
- ・発表用具の活用



3 具体的な取組

下学年ブロックの取組

研究授業の記録「国語」

- 1 授業者 柿沼隆男（3年）
- 2 単元名 「じょうほうをもとめて読む」
「めだか」（説明文）
- 3 本時の目標
○内容の細かい点に注意しながら、文章を読み取ろうとしている。
○自分の考えをワークシートにまとめ、順序よく話すことができる。
- 4 指導方法の工夫
(1) ワークシートを使い、文をスムーズに書けるようにした。

- (2) ペア学習やグループ学習を取り入れてから、全体での話し合いに入っていくことで、読み取りをより確かなものにした。
- (3) 視覚にうったえる挿絵をたくさん活用した（板書の工夫）
- 5 研究協議
- 動作化や場面絵により視覚効果が高く、理解を深めることができた。
 - グループ学習を取り入れ、やりとりのある授業が展開できた。
 - 机間指導や発表を通じて、発表力や学習内容の定着度を高めていく必要がある。

上学年ブロックの取組

- 研究授業の記録「総合的な学習の時間」
- 1 授業者 関口勝信（4年）
 - 2 単元名 「野菜の育て方や料理の仕方を調べよう」
 - 3 本時の目標
調べたことを資料を使ってわかりやすく友だちに伝え、学び合うことができる。
 - 4 指導方法の工夫
 - (1) ペア学習、グループ学習を取り入れ児童同士の意見交換を重ね、最後に発表会を開いた。（学習形態の工夫）
 - (2) 模造紙に写真を貼ったり、画像を投影するなどして発表させた。（発表教具の活用）
 - (3) ワークシートを活用し、各自の学習活動を振り返らせた。（継続的なふりかえり）
 - 5 研究協議
 - 児童の発表する態度、聞く態度が良かった。
 - 発表会までの準備もよく、本時のねらいを明確にして、児童に示せた。
 - 発表内容の掘り下げや資料の作り方を示すことが必要。また、質問のタイミングも発表直後が良いのではないかと。
- 指導講評（秩父市教育委員会 小林章男 主任指導主事兼教育研究所長）
- いろいろな方法で児童に表現させていることが良い。質問の場面がやりとりを深めるチャンスなので、皆で思ったことや感じたことを話し合い、協議させると良い。
 - 発表用の模造紙ならば、図やグラフ、絵、写真中心にまとめさせると良い。

4 その他の取組

- (1) 「家庭学習・読書貯金」への取組
家庭での毎日の学習時間と読書時間をカードに記録させ、それを貯金として累積することで意欲化を図る。
- (2) 『学習すること』『わかったこと』の黒板掲示用カードの使用
全学年で各教科等における本時の学習課題と学習内容を明らかに授業を実施。
- (3) 毎週2回の朝学習の実施
毎週水曜日の業前10分間は、ワークシート等による文章を読んで内容をまとめる学習、毎週金曜日の業前は、漢字・計算ドリルによる学習を年間を通して継続的に取り組んでいる。
- (4) 小中が連携しての取組
中学校の定期テストに合わせて家庭学習集中取組期間を設定し、〔学年×10分間＋5分間〕以上を目標にして家庭学習習慣の定着に向けて取り組ませている。
- (5) 授業の始めと終わりのあいさつの統一と定着（小・中連携）
大田中の学習規律に合わせ、「お願いします！」「ありがとうございました！」おはつきり大きな声をださせている。
- (6) 3～6年生学力向上プロジェクト「補習授業」の実施（拡充）
年度末の2週間3～6年生に各学年のまとめの補習を放課後実施している。
- (7) 夏休み算数教室の実施
4年生以上を対象として夏休み期間中の5日間プール指導の前の時間を使って、計算練習プリントに取り組ませている。

5 おわりに

- (1) 成果
 - ペア学習のやり方やみんなの前での発表が上手になった。また、書く作業を多くすることで、書くことへの抵抗がうすらいだ。
 - 自分（たち）で課題を解決していく学習を続けることで、調べ学習や発表会に意欲的に取り組めるようになってきた。伝えたいことを相手にわかりやすく伝えるために、自分（たち）でまとめ方を考え、進んで発表するという姿勢が身についてきた。
- (2) 課題
 - 発表するとき、ただ原稿を読むのではなく、内容を頭に入れ、聞いている人たちの方を見て発表できると良い。（担当 教諭 宮原 孝）

「考え、話し合い、学び合う学習」推進事業を受けて

秩父市立影森小学校

1 実践研究の内容について

(1) 実践研究の理念

ア 学習への主体性の育成

学び方を学び、思考ツールを主体的に活用する児童の育成に努める。

イ 学習内容の確実な定着

基礎基本の着実な定着を図る学習指導の実践を行い、教師の授業力を高める。

ウ 思考力・判断力・表現力等の育成

思考ツールを使い、互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる力を身に付けさせる。

(2) 実践研究を行うにあたっての準備

ア 児童の実態把握

各学年・学級経営における実態把握、実態調査等の分析を通して行い、課題の見通しを立てる。

イ 目指す児童像の設定

思考ツールを主体的に活用して課題を解決し、思考力・判断力・表現力等の育成を図り、確かな学力の身についた児童を育成する。

ウ 集団づくり

学年・学級経営を基盤に学び合う学習のポイントをおさえ、認め合い、学び合う望ましい学習集団を育成し、共に実践に参加する態度を育てる。

エ 「話し合いマニュアル（話形・ルール等）」の作成

児童の実態に合わせた、話し合いで使用する手法や思考ツール等を準備し、児童が学習をスムーズに進められるよう支援する。

(3) 考え、まとめる工夫と、話し合い、学び合う工夫

ア 学習形態や思考ツールについては発達段階を考えて活用する。

各学年・各教科・単元において、児童の実態に合わせて学習効果を高められる単元を選択し、研究実践を進める。

イ 発表のきまりや教科によるノート書き方を徹底し、まとめる。

(4) 小中連携について

ア 合同研修会について

長季休業中に合同研修会、互いの学校の授業研究会の参加、小中の研究主任の打ち合わせを随時実施し、理念等や実践研究における意見交換、情報共有、研究の深化を図る。

イ 発達段階に応じた研究について

小学校においては、例にあるすべての学習形態や思考ツールを活用するのは難しいので、学年や教科・単元の特性に合わせて研究実践を進める。

2 事業実施による期待される効果

(1) 児童生徒の変容（数値的な変化・質的な変化）

ア 初めのアンケートの結果の中で、高めたい項目を絞り込み、もう一度アンケートを取り、児童の変容をみることができる。

イ 適切な手法や思考ツールを用いて、自分の考えをまとめ発表し、主体的に学び合う学習を進めることにより、学力が向上する。

(2) 教職員の変容（意識・指導）

ア 思考力・判断力・表現力等の育成の意識が高まり、より効果的な学習形態や思考

ツールの活用を効果的に使えるようになる。

イ 児童の学力の向上のために授業改善が図られ、教師一人一人の実践力が高まり、指導力が向上する。

3 研究授業

(1) 5年生 学級活動「自転車にするか、バスケットボールにするか？」

ア ねらい

学校生活や友人関係の中で起こりうるあらゆる状況の中から、意見の違いによる言い争いの場面を想定し、みんなが（双方が）、納得するための解決方法を考えていくことにより、対人関係スキルを高めていく。

イ 授業者反省

- ・「ライフスキル」の研修で学んだ「エネジャイザー」も取り入れてやってみた。
- ・資料が少なく授業例もあまりないので、これから学んでいき、児童に必要なことを身に付けさせていきたい。
- ・男女の仲はよく、手つなぎをいやがらないので、やりやすい雰囲気が進められた。また、事前のアンケートでも友だちと意見が違ったら「自分がゆずる」と答える子が多かった。子どもたちに助けられて授業が進められた。

ウ 協議

- ・子どもたちなりに、一生懸命考えていたのはよかった。また、グループ内になかなか書けない子がいても、待つてあげられる態度に感心した。
- ・互いに補い合えるところで助け合う場面を、各教科・各活動で行うようにしている。どんなことでも話し合って決めていくことで、子ども同士の心の交流を図ることが大切ではないか。

エ まとめ

- ・本来、遊びや生活の中で学び、自然に身に付けていたことが、社会の変化や子ども・家庭を取り巻く環境の変化によって身に付けられなくなってきたことから進められている。
- ・教師自身も楽しんでやることで、子どもたちも楽しく活動できると思う。

(2) 4年生 理科「物の体積と温度」

ア ねらい

空気、水、金属を温めたり冷やしたりしたときの体積の変化に興味をもち、閉じ込められた空気、水、金属の温度と体積の変化について、比較しながら調べる活動を通して、変化の様子がそれぞれ変わること等、空気、水、金属の性質について考えをもつことができるようにする。

イ 授業者反省

- ・思考ツールをもっと活用しようと考えたが難しかった。
- ・段階を踏んで話し合わせようと中間報告をさせたが、やはり時間が足りなくなってしまった。

ウ 協議

- ・思考ツールにとらわれすぎると、授業が難しくなるがどのように取り入れたらよいか悩みどころである。
- ・話し合い活動を児童は頑張っけて取り組んでいた。生活班で取り組ませているが、意見の反対する児童を分けて、ディベートやパネルディスカッションのようにしてもよかったかも知れない。
- ・イメージしたことを表現することは難しいので、思考ツールを活用し表現の仕方を学べるとよい。

エ まとめ

- ・本時の目標は「前時の3つの実験結果から考察する」ことなので、ワークシートを使ったのもよかった。
- ・話し合い活動のさせ方は、人数や組み合わせをいろいろかえてやってみるとよい。
- ・話し合いの中に評価役をつくる。何度も実践を重ねる中で、力をつけていくことができる。

4 その他

平成27年2月17日には「考え、学び合い、話し合う学習」公開授業を行い、2年生生活科、4年生・5年生国語の3学級の授業を公開し、実践を積み重ねていく。来年度も継続して研修を推進し、実践の結果をまとめて報告を行い、研修の成果を県内の学校へ広めたいと考える。

(担当 教諭 設楽尚孝)

進んで学び合い心豊かでたくましい子の育成

—よく知って、しっかり食べて、大好きになる食育指導のあり方—

秩父市立吉田小学校

1 はじめに

学習指導要領総則に「学校における食育の推進」が位置づけられ、食育指導は、どの地域、どの学校でも取り組むべき課題となった。全国学力・学習状況調査結果で学力と朝食摂取に明らかな相関関係が見られるように、食事は、学力、規律ある態度、体力などの「生きる力」の基盤だといえる。

そこで本校では、学校教育目標である「心豊かなたくましい子」の実現に向け、食育指導の視点から教育活動を見直し、教師の指導力向上と児童のよりよい食習慣の形成に取り組むことにした。

2 研究の概要

(1) 食に関する課題の把握

ア 給食指導では、学年に応じた食事のマナーや配膳の技能が十分身につけていない。

イ 幼保、小、中共通アンケートでは、家庭で朝食欠食の児童が見られたり、食事の挨拶や手伝いをしない児童が見られたりし、食に関する親子の関わりが少ない。

(2) 研究仮説と手立ての設定

ア 仮説1と手立て（一部省略）

【仮説】ユニバーサルデザイン（UD）の視点をとり入れた、「わかる・考えられる授業」を工夫すれば、食に関する知識や技能が高まるだろう。

【手立て】活動の狙いを明確にし、資料提出の方法や発問を具体的に焦点化する。課題や学習内容、児童の考えを視覚化、共有化し理解や思考を深める。



[UD化の3つの柱]

イ 仮説2と手立て

【仮説】地域や学校の特色を生かした活動を充実させれば、食に関することへの関心や実践への意欲が高まるだろう。

【手立て】栄養教諭や養護教諭など専門的な立場の人と連携した指導を行う。学校や地域の生産活動や自然にふれる体験的な活動を生かした指導を行う。



[地域の方・保護者と田植え]

ウ 仮説3と手立て

【仮説】教育課程に、食に関する指導を確実に位置づけ指導すれば、食への関心や実践への意欲が高まるだろう。

【手立て】食に関する教育計画を作成する。

食育の日を活用し、家庭用実践カードや食育便り、HP等で児童・保護者へ食に係わる取組を意識づける。



[家庭用食育の日マグシート]

(3) 指導の実際例

ア 第一回授業研究会 6月19日(木) 1年学級活動「じょうずにたべよう」

授業者 原島美英教諭 江野祐美子栄養教諭

(ア) 「給食の動画」「食べこぼしの写真」で課題を焦点化

(イ) 明確な目標のある栄養教諭の指導(箸の使い方)

(ウ) 家庭実践カードで継続的な評価と指導



[楽しみながら目標を達成]

イ 第二回授業研究会 7月2日(水) 4年体育「育ちゆく体」

授業者 岩城清美教諭 江野祐美子栄養教諭

(ア) 具体的資料や色分けによる課題や学習内容の視覚化

(イ) ペア学習で課題や思考の共有化と個別の支援

(ウ) 実践カードで個別の目標設定と継続的な評価と指導



[家庭でも実践を継続]

ウ 埼玉県小・中学校食育指導力向上授業研究協議会

11月20日(木)

2年生活科「サツマイモを収穫しよう」

授業者 黒沢恵理教諭(保護者8名)

5年家庭科「元気な毎日と食べ物」

授業者 清水貴行教諭 江野祐美子栄養教諭

(ア) 日常の生産活動と連続性をもたせた授業展開

(イ) 教科の目標達成のための保護者との適切な連携(インタビュー、共同作業)

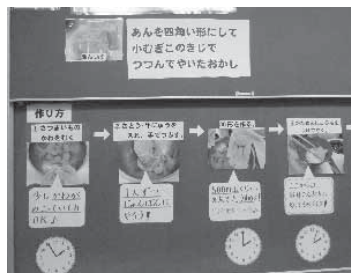
(ウ) 短冊や付箋による児童の思考、作業手順の視覚化・共有化

(エ) 次時の学習や生活実践につながる実践カードの活用

(オ) 栄養教諭(T2)の指導に焦点化させる担任(T1)の発問と指示



[感謝の心が生まれる連携]



[手順が視覚化された板書]



[児童の疑問に答える栄養教諭]

3 研究の成果と課題

(1) 成果

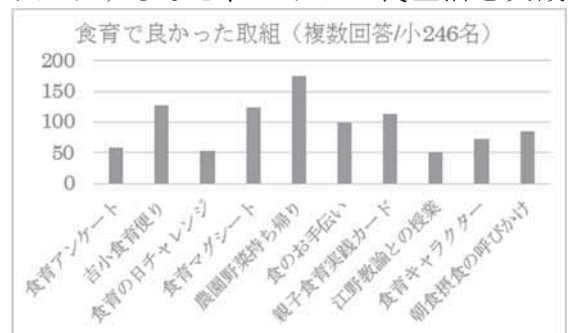
ア 生活実態や学習内容を視覚化・焦点化したり栄養教諭・養護教諭と協力したりすることで、児童が驚きや興味をもち意欲的に食に関する学習に取り組めた。

イ 家庭用実践カードにより家庭の協力を得た実践や学校給食での見届けができ、よくかんで食事をしたり箸の持ち方やマナーに気をつけたりするなど、よりよい食生活を実践する姿が見られるようになった。

(2) 課題

ア 家庭での朝食欠食や食事への関わりの改善はわずかだった。今後も家庭環境の変容に向けて、親子食育実践など効果のあった取組を継続していく。

イ 幼保中の連携を強化するため、12年間を見通した指導計画の作成や栄養教諭を中心とした共通の取組などに取り組んで行く必要がある。



[効果のあった取組アンケート]

(担当 教諭 古林 学)